

京鹿子



昭和二十三年九月二日第三種郵便物認可
平成十七年六月一日発行
通巻九七〇号（毎月一回一日発行）

6月号

春 雷
丸山佳子

あ
ら
た
め
て
聞
け
ぬ
現
実
草
は
穂
に

蛇
穴
を
天
地
無
用
の
箱
積
ま
れ

一
蝶
の
畑
に
大
袈
裟
ロ
ケ
ー
シ
ヨ
ン

あ
あ
久
し
洗
心
さ
せ
る
春
の
雷





こめかみに合はぬ料理に初音して
椿八重この家大正ロマンめく
村は市に川三月の水青き
とべぬ鳥亀と遊んで啼かしてる
林としてあまり笑はぬ保安林
外人と笑みを交はして花仰ぐ



清響集
豊田都峰
その五十



田まはりのすめば月夜の遠蛙
湖東路に花恋に晴さづかれり
春耕す湖東の天をともして
日はひとつ湖なる国の紫木蓮
信心に登れば花の金剛界
生身なる秘仏は天の花の中

耕して地平線を知らぬげに
花ぐもりかげもつこともなきひと日
かすみ草抱きしよりの月日かな
菜の花やうたはひかりになりけり
燕反る湖国に空はあまりゐて
青嶺比良までいちまいの湖の空
行く春や湖はあふれてあたりけり
春逝かす汀の音とゆれながな

秀華採集

菜の花は吃水線なり逢ひにゆく

井上 菜摘子

一面の菜の花畑、上半身を浮かして心晴れやかにゆく。逢いに行くのである。この具体的な描写で十分である。「吃水線」が適切な用語として働いているが、逢う心が色はなやかに謳われている。

薄氷の育つ絹糸はじくたび

荒川 美邦

耳とほきふりする猫よ春の雪

滝沢 環

前句、この二句一章による、響き加減が詩性である。散文になおすことが出来ないような味わいは感じ取るより仕方がない。後句も切れが効いているが、作者の滲み加減が抜群である。

鈴鹿 仁

春暖炉

かがなべて湖族の夢の春暖炉
内侍悲話はつ蝶となり湖を恋ひ
七教の人の和重し柏餅
辛夷咲きダム一景を耽美せり
夏蝶の骨頂となる真昼どき
山蟻は頭でつかち三思せる
十葉は三尺の虫の封じ手に

近 詠

宇都宮滴水

それから

芦の角底に残せし嘘ひとつ
それから都忘れの風となる
神の裾乱す音痴の花むしろ
乗込鮒杭のいつぱん不機嫌に
花供養祈りすぎたる手のゆくへ
舩挿舟空の一角無心なり
若楓たしかに風の見えてゐる

神麓集



梅嶺の門を叩くや山笑ふ
パリー博見てより栖鳳遠霞
薄がすみ画心生きいき霞中庵
はだ小雪霞中庵主の筆つかひ
牡丹の芽栖鳳一門の記念館

林 日圓

庭眞白地震もありて二月盡
寒明けて偽五百円のさばりぬ
佗び住みて形ばかりの豆撒きを
今年また春の満月拝みけり
玻璃越しのきびしき朝氣葛湯など

北村 香朗

猫無宿 丸山 冬鳳
雪疎林嶺の齡の百年杉
片屋根は片谷街道雪残る
猫無宿春の甘えの日矢もらひ
水温む畑白菜の鉢巻解け
禽が禽ぼうほど雪解空青し

石庭の石の余白にある遅日
見えてゐて聞こえぬ水車日の永し
在るがまま今在る幸や春の虹
手漕ぎして送る紙舟水温む
散りぎはの生身の重さ八重椿

遅日 藤岡 紫水

塗り替へし遊具の赤は冴返る
中筋は風の中筋冴返る
早春の鶯の畝の曲りぐせ
早春の鶯伊丹に高く二つの輪
早春の艶くもらせる十七才

十七才 森津 三郎

花まみれ 丸井 巴水
地が揺れて桜前線押し上ぐる
折り返し淡き裏見の花の道
振り返る齡は多し花まみれ
落花霏々大学生はみな無帽
花に風鬼籍浅きは生ぬるし

神麓集



梅雨深し 竹貫 示虹
 老鶯や嵯峨の竹藪奥知れず
 田植糸待つつ水を鏡の男山
 竹皮を脱ぎ人間に目のうろこ
 とんぼ生れ風の言葉を目で探す
 稱名や乱れし瀧の下半身

紅梅日和 北川 孝子

自答してなほも迷ひぬ雪消の芽
 春そこに追ひ風を読む心の帆
 凡人が凡人たたふ梅疾風
 ほどほどの暮しや紅梅日和かな
 薄紅梅息ととのへて息を吸ふ

綾部山梅林 川崎 光一郎

梅林の容に陽射す綾部山
 海風のはこぶ梅の香三樹彦句碑
 梅の香やそぞろ句づくり誘ひだす
 白梅や墮落たたへし安吾の忌
 梅散つて葦の残りし葱偲かな

笠間 圭子
 春浅し雀吹かるる河川敷
 貝塚に貝の断層地虫出づ
 海きさら荒尾時間が出る地虫
 彼岸潮行けば胡鬼師に会へさうな
 絹の雨三色すみれべそかいて

花の上野 伊藤 希眸

鯉に花水に屈託あつまれり
 天蓋の花より入る三次元
 堰のない人の流れを花三日
 満開のさくら戦く鐘の音
 散る花や一つに上野の彰義隊

高橋 千美

孟宗の打ち合ふひびき座禅草
 比良よりの水にすわれる座禅草
 群落の一と揺れもなし座禅草
 無駄多き日々のたつきや座禅草
 遠くより来し人ばかり座禅草



京鹿子集

豊田都峰選

花菜畑へつづいてゐたるオムレット

菜の花は吃水線なり逢ひにゆく

ふくろふの百八十度白昼夢

梟や余計なものに腕時計

高階や触れてスプーンに春の音

薄氷の育つ絹糸はじくたび

いきいきと葉呑みあふ女正月

一羽なれば黒も小粒の寒鴉

現生の今どりのあたり豆を撒く

春耕の手始め煙上げにける

溶けるとき光大きく軒つらら

亀岡 井上菜摘子

城陽 荒川 美邦

東京 滝沢 環

耳とほきふりする猫よ春の雪

根深汁夫婦の顔の似る不思議

白障子穴の開くほど喋る人

目鼻だけあれば充分春日和

勉学の灯に雛の灯の交はれる

菜の花や潮騒つゞく安房三里

寒波来る只中に七味唐辛子

牡丹の芽弥陀来迎を待ちゐたり

水仙忌句稿に残る師の朱筆

紅梅の風瘦身を鞣しをり

車椅子押し出してくる春一番

千葉 河内 桜人

伊藤 希眸